

大賀蓮の奇跡 平成 24 年 7 月 7 日 講演

蓮文化研究会・事務所
事務局長代行 千島秀元

大賀蓮とは

昭和 26 年（1951 年）3 月 3 日から 4 月 6 日にかけて、千葉県千葉市検見川（花見川区朝日ヶ丘町・地下約 5.5 メートル／泥炭層の下）にある東京大学検見川厚生農場（現在は、東京大学検見川総合運動場）の落合遺跡で、古代の蓮の実が発掘されました。この蓮の実が大賀一郎博士によって発芽・開花し、博士が年代測定の結果から 2000 年前の実と推測した蓮です。

大賀蓮の実、出土の遺跡

戦時中に都は、当時の燃料不足対策として、花見川の下流地域（東京大学検見川厚生農場の土地）を借地し、泥炭を採掘していました。

戦後もしばらくこれが行われていましたが、昭和 22 年（1947 年）7 月 28 日に採掘現場で、1 隻の丸木舟と 6 本の櫂（カイ・オール／2,500 年前に遡る石器作り）が掘り出されました。

このため慶應大学によって調査が開始され、東洋大学や日本考古学研究所も加わり、昭和 24 年（1949 年）まで共同発掘調査が行われています。

その結果さらに 2 隻の丸木舟、蓮の実、茎、葉、果托などが掘りだされ、縄文時代の船だまりであろうと推測され「落合遺跡」と名付けられました。（蓮の実等は捨てられています。）

大賀蓮の実、発掘

理学博士（東京帝大）で、植物学者でもある「大賀一郎博士」は、昭和 26 年（1951 年）3 月 3 日から、地元の小・中学生、一般市民などの協力を得て、この「落合遺跡」の発掘調査を行いました。

30 日の夕刻、花園中学校の女子生徒「西野真理子」によって地下約 6 m の泥炭層から、蓮の実が 1 粒発見されました。（土をふるうザル上に発見）

この為、調査期間を延長し 4 月 6 日、さらに 2 粒の蓮実を発掘しています。

大賀蓮の実の発芽育成、開花

大賀博士は東京都府中市の自宅で、発掘された古代蓮の実の発芽育成を試みますと、3 月 30 日に最初に出土した 1 粒だけが奇跡的に発芽し育ったのです。

これを千葉県農業試験場で蓮根を育て、翌年の昭和 27 年（1952 年）東大検見川農場、千葉公園に分根しました。

このうち東大検見川農場に分根した蓮根を、大賀博士の依頼を受けた伊原家の当主が、自宅で古鉄釜（醤油豆蒸し用）に田土を入れ植込みました。

同年 7 月 18 日に初めてピンク色の大輪の花が開き、LIFE 誌に掲載され「世界最古の花」として、海外にも知られることになりました。

大賀蓮の実の年代測定

昭和 26 年（1951 年）12 月に博士はこの蓮実の年代を知る為、落合遺跡の地層から発見された、丸木舟の木片を米国シカゴ大学の Libby 博士に測定依頼しました。

この測定結果が、昭和 28 年（1953 年）5 月 20 日付けで届いた航空便によって、「丸木舟の木片測定年代を 3075 年前± 180 年」と伝えられました。

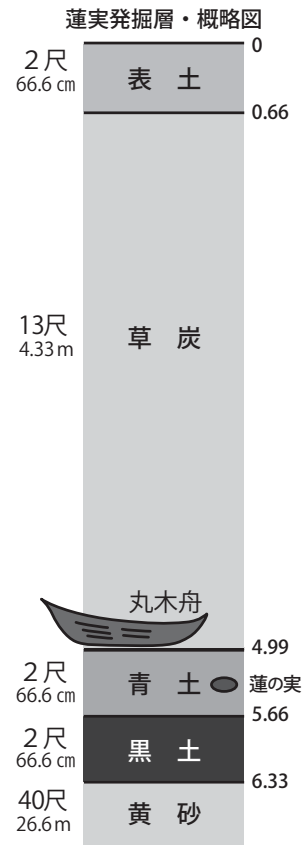
この測定結果から大賀博士は少なく見積もっても、2000 年前の蓮実であるとみて二千年蓮と公表し。大賀蓮と呼ばれるようになりました。

大賀蓮の広がり

1953 年（昭和 28）8 月 5 日、移植した千葉市弁天池で 4～5 本が開花しました。

1954 年（昭和 29）6 月 8 日、千葉県天然記念物に指定されています。

以後、東京大学緑地植物実験所や千葉公園から、日本各地をはじめ、世界各国へ分根され友好親善を深めています。



仏教と蓮 平成24年7月7日 講演

蓮文化研究会・事務所
事務局長代行 千島秀元

初期の根本仏教においては、「池に生える蓮華の茎や花をば、水にもぐって折り取るように、情欲をすっかり断ち切った修行僧はこちらの岸を捨て去る」と、教えている。「いかに蓮が美しくても、少しも心が動じてはならないのである。」なぜ花の中で蓮なのか、遠い昔から蓮の香り色彩、姿などに神々しさを、多くが別格として認めていたからであろう。

蓮を気高く受け止め、極楽世界の象徴に昇華させるのは、ヒンズー教の影響を受けた大乘仏教で、チベット、中国、朝鮮、日本の北伝仏教はすべてこの仏教である。

ヒンズー教世界には、蓮の女神がおり、蓮華化生、蓮華座に満ちている。このヒンズー教の神々が如來や菩薩になったので、殆どの諸尊の姿が蓮台に座し、立ち、蓮を持つのである。これが極まるのが最後の大乗仏教である密教で、大半の仏具が、蓮を象ったものになっている。

魔を祓う独鈷杵（諸刃槍）の握り部分が蓮で、武器を蓮で正している。香を捧げる柄香炉（持ち香炉）などには、蓮の花、花托、茎に至るまで造形を採り入れている。曼荼羅の諸尊の座も蓮座である。

密教は儀式が調えられているので、全ての大乗仏教宗派は密教を採り入れて成立しており、八万四千の經典のあらゆるところに、蓮が象徴的に登場する。

チベットに仏教（密教）をもたらし築いた、蓮華生（パドマサンバヴァ Padmasambhava）は文字通り、ウディヤーナ（烏杖那国／今日のパキスタン、スワート渓谷に当たる）ダナコーシャ湖の蓮の花から8歳の子供の姿で現れたという伝承がある。

日本における身近な仏教經典『浄土三部經』においては阿彌陀經で、「極楽国土には七つの宝でできた池があり、八つのすぐれた功德を持つ水がそのなかに充満している。池の底には一面に金の沙が敷きつめられている。その四辺には階段があり、金・銀・瑠璃・水晶でできている。上には楼閣があり、これもまた金・銀・瑠璃・玻璃・シャコ・赤真珠・碼瑙で美しく飾られている。池のなかの蓮の花は、大きさは車輪のようで、青い花は青い光を、黄色い花は黄色い光を、赤い花は赤い光を、白い花は白い光を放っていて、かぐわしい香りを放っている。」とある。

『法華經二十八品』では、

提婆達多品第十二「蓮華化生…、宝ノ蓮華に座して…、蓮華より降りて…、」

法師功德品第十九「赤蓮華の香…、青蓮華の香…、白蓮華の香…、」

藥王菩薩本事品第二十三「口の中から常に青蓮華の香りを出し…、まさに青蓮華に抹香を盛れるだけ盛って、その者の上に散華せよ…、」

妙音菩薩品第二十四「八万四千の多くの宝の蓮華を化作しました…、その蓮華の茎は…、文殊師利法王子はこの蓮華を見て、仏にお尋ねしました。「世尊、これは何の因縁でこのような瑞が先んじて現れたのですか。何千万もの蓮華が有ります。茎は閻浮檀金で、葉は白銀で…、通過した諸国は六種に振動し、その全ての国で七宝の蓮華が雨の様に降り…、この菩薩の目は廣大で青い蓮華の葉の様で…、など蓮が登場する。

一般に知られていないお経にも蓮は様々登場する。その一つに、『泥中の蓮』として、知られる美しい話がある。これは『維摩經』に書かれている「譬如下高原陸地不レ生二蓮華一、卑湿淤泥乃生中此華上」が解釈され伝えられているものである。

浄土真宗の開祖親鸞聖人は、これを「煩惱の泥の中に蓮の花を開く」とは、維摩經に「高原の乾いた陸地には蓮の花は生じないが、低い湿地の泥沼には蓮の花が生じる」と説かれている。これは、凡夫が煩惱の泥の中であって、菩薩に教え導かれて、如來回向の信心の花をひらくことができるのをたとえたのである。と、説いている。

この影響が大きいようで、「蓮（はす）は泥の中で清らかな花を開くところから、転じて、煩惱の汚れの中であって、染まらず清浄を保っている人の喩え。」として伝わっているようである。

しかしこれは最古の仏教經典、スッタニパータにズバリ、「水の中に生じた蓮が水に汚されないように、そのような諸々の欲情に汚されない人—彼らは彼をバラモンと呼ぶ」とある。